

## [巻頭言]

## 編集委員長就任にあたって

専修大学 大学院経営学研究科長・経営学部教授

大曾根 匡

このたび編集委員長に就任しました大曾根です。何とぞよろしくお願ひ申し上げます。その初仕事として、学会誌 Vol.13, No.1 をお届けします。

編集委員長の就任にあたり、次のことを目指していきたいと考えております。

## ■学会誌のオープンアクセス化

ご承知のように、本学会の学会誌はオンラインジャーナルです。ですから、本来は世界中の方が学会誌にアクセスできるはずですが、しかし、実際は会員の利益を優先させ、会員だけしか閲覧できないようアクセス制限をかけています。これにより、会員が学会誌を読もうと思っても、会員 ID やパスワードを求められるので、その時点で読むことを諦めてしまうのではないのでしょうか。これでは、オンラインジャーナルのもつ広い発信力や速報性の良さが失われます。そこで、学会誌をオープンアクセス化し、学会誌をストレスなく読んでもらえるようにしたいと考えています。それにより、情報システム学会の発信力が強化され、会員数を増やすことにもつながると考えます。

## ■掲載論文数の増加策

過去の学会誌を調べてみたところ、11年間で22回発行しており、その中で掲載された論文数は24本でした。したがって、平均約1本の論文しか1回の発行誌に対し掲載されていないこととなります。3回連続して論文が掲載されない期間もありました。これでは、学会活動が低調であるという印象を与えてしまいます。一方、投稿数は77件ありました。会員数の4分の1程度の方が投稿したのですから、会員の論文執筆意欲は高いのではないのでしょうか。能動的に学会に関わっていこうという会員が多い証

だと思えます。結局、論文査読により3分の2の論文が却下されている現実があります。論文の品質を守ることは、学会の品位・品質を高めることにつながるもので、必要なことであることは十分承知しております。その一方、本学会に対する会員の投稿意欲を減退させているのも事実です。「こんなに査読が厳しいなら、権威のある某学会に投稿した方がよい」という声を複数聞いたことがあります。現状は、「掲載論文が少ない → 査読が厳しいのでは? → 投稿意欲が減退する → 本学会には投稿しない → 投稿論文が少ない → 掲載論文が少ない」という負のスパイラルに陥っているのではないかと、筆者は推測します。

そこで、高品質を維持しながら、採択率を向上させる方策はないかということになります。会員の魂の入った投稿論文をしっかり受け止め、大切に扱い、磨いてあげる方策です。具体的には、せっかく投稿していただいた論文ですから、査読というよりも、むしろ良い論文に育てるという精神をもつ査読制度を創れないかと思っております。やや内容が粗雑であったり、検証が不十分であったりしても、すぐに「不採録」と結論付けず、どこをどう修正すべきかを丁寧にコメントしてあげるような教育的査読制度を構築できないものかと考えております。それが構築できれば、「掲載論文が多い → 採択率が高いのでは? → 投稿意欲が増大する → 本学会に投稿する → 投稿論文が増える → 掲載論文が多い」という正のスパイラルに変化していくのではないかと思います。そのときには、学会誌の発行回数も増やすことができ、学会の活性化も達成されます。発行回数が増えれば、研究業績の求められる研究者や大学院生が業績発表の場として本学会誌に着目するようになり、それが会員数も増加にもつながる

と思います。

また、企業の方による実践的で事例的な論文に関しては、本学会の魅力的なコンテンツのひとつとしてなるべく掲載できるようにし、本学会誌が企業の方にも興味をもってもらえるようにしたいと考えております。

初代会長の北城氏は学会設立時の挨拶の中で、「実務家と研究者」の交流を本学会の主要テーマのひとつとして掲げました。そこでは、

- ・「情報システムを構築してきたシステムエンジニアなどの経験は事例研究として公開することが理想である。」
- ・「システムエンジニアなどにとって敷居の高かった学会活動のバリアを取り除き、システム開発の事例をもとに、気軽に実務家と研究者が意見交換し、共同研究する場が必要である。」

と述べております。本学会誌もその精神を引き継いでいきたいと考えております。

## ■査読期間の短縮化

現在でも査読期間の短縮には配慮されていたとは思いますが、実際には、ここ4年で最終的な査読結果を得るまでに6か月以上かかった事例が8件あります。前編集委員会の名誉のために言及しておきますが、最近では2か月から4ヶ月の期間で最終査読結果が提示されており、かなり改善されています。

筆者は、査読プロセスを見直して、2か月以内に必ず査読結果を提示できるように、さらに改善したいと考えています。そして、平均査読期間を公表し、それを編集委員会の評価指標のひとつとしたいと考えております。

ただし、編集委員が査読者を探すのも大変ですし、指名された査読者に多大なご負担をおかけするのも事実です。しかも、要求だけされて、査読者には何の見返りもありません。しかし、学会ですから、会員相互が助け合わねばなりません。会員の皆様に査読のお願いがあった場合は、快くお引き受けいただくことをお願いいたします。

以上、ここに掲げた目標は筆者個人の考えであり、「風が吹けば桶屋が儲かる」式

の拙い推論と希望的観測に基づいており、具体的な構想はこれから設計するというのが現状です。実現可能性についても検討しておりません。ですから、実現するためには、具体案を提示し、編集委員会や理事会などの賛同を得る必要があります。さらに諸規程の変更も必要です。したがって、すぐに達成できるものではありません。達成できるかどうかもわかりません。夢物語で終わるかもしれません。しかし、ルール通りにルーチンワークをするよりも、既存のルールを見直し、新しいルールを模索するほうがやり甲斐があるので、スピード感を持って、頑張ろうと思っています。

さて、委員長の交代に伴い、編集委員もフレッシュなメンバーになりました。編集委員会では、学会誌のアクセス数を増やすために、学会誌のコンテンツも刷新しようと考えております。手始めに、今回から「研究会便り」というコンテンツを加え、研究会の魅力を会員・非会員に伝達しようと思います。また、「特集号」を企画しようと考えています。特集号のテーマのもとで、多数の会員から多様な意見や考え方を発信してもらおうと考えています。最初のテーマは「情報システム学を振り返り、そして未来へ」とし、そのテーマに対する論文や意見を募集します。会員皆様の投稿をお待ちしております。

最後になりますが、今回退任される編集委員の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。その多くの方々は、学会発足時から編集委員を務めてこられ、学会誌の立ち上げ、諸規定の作成、査読システムの構築など、大変なご苦勞をされたものと思います。今後も、編集委員会の活動を見守っていただき、ご意見を頂戴できれば幸いです。

## 著者略歴

### 大曾根 匡（おおそね ただし）

1984年東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻博士課程修了。理学博士。同年（株）日立製作所入社。システム開発研究所に配属され、データベースの高速化の研究開発に従事。1989年専修大学経営学部専任講師、助教授を経て、1999年教授、2017年専修大学大学院経営学研究科長、現在に至る。